

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16808

研究課題名(和文) 19世紀末から20世紀初頭におけるエゴチズムの系譜ーバレスとプルーストを中心に

研究課題名(英文) Genealogy of Egotism the end of the 19th century - from Barres to Proust

研究代表者

鈴木 隆美 (SUZUKI, TAKAMI)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：20631948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：従来あまり問題とされていなかった、19世紀末から20世紀初頭における、フランス文学におけるエゴチズムの展開に焦点をあて、特にバレスとプルーストの作品群を比較検討した。その際、当時のドイツ観念論がいかにフランスの知的言説に影響を与えていたのかを調査し、その上で、両作家にあっていかに真理、主体、魂といった概念が作品に結実していくのかを見た。特に宗教建築や音楽、さらには舞踏の表象について、ドイツ観念論にインスピレーションを受けつつ、作品化されていくエゴの問題について分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀から20世紀のフランス文学にあって、多かれ少なかれ問題となったエゴの表象について、バレスとプルーストを例に挙げて、その展開の一端を明らかにすることができた。本研究では、日本語文化圏では馴染みの薄い、西洋近代の絶対性、主体、自我、真理などの問題系を、具体的な文学作品の読解を通じて分析を行った。そのような作業を通じて、外国文化の理解というより広い視点から見ると、日本文化にあっては常に誤解や曲解がつきまとうイデアリスムを、より深く正確に理解するための一つの手かかりを示す作業となった。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the development of egotism in French literature from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century, which has not been treated in the past, we compared and examined the works of Barres and Proust. Then, I investigated how the German idealism at that time influenced French intellectual discourse, and on that basis, how the concepts such as truth, subject, and soul would be represented in the works in both writers. Especially with regard to the images such as religious architecture, music, and dance, I analyzed how the problem of Ego, inspired by German idealism, functioned in their works.

研究分野：フランス文学

キーワード：プルースト バレス エゴチズム イデアリスム 真理 魂 主体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

近年、プルースト研究の枠組みでは、華々しい文学理論の実験台としてプルーストの作品を取り扱うのではなく、19世紀の知的状況との関連でプルーストの文学的営為を捉える試みが多く出てきている。とはいえ、19世紀エゴチズムの系譜としてプルーストを捉える試みはほとんど見当たらなかった。そもそもが19世紀フランス文学におけるエゴチズムの研究、さらにはより広い意味でのイデアリズムの研究は、近年あまり行われていなかった。研究テーマとしてはやや古色蒼然とした感があったからである。

2. 研究の目的

本研究ではこのイデアリズム、エゴチズムの系譜としてプルーストを捉えることにより、プルースト研究、さらにはエゴチズムの研究について新たな光を投げかけることを目的とした。19世紀にスタンダール、バルスから始まり、20世紀に至ってはプルースト、ジッド、ヴァレリーといった作家によって様々な形で展開していったエゴチズムの系譜であるが、こうした流れの中にプルーストの作品を置くことによって、何が見えてくるのかを明らかにすることを研究の目的とした。

3. 研究の方法

そのため、エゴチズムを理論化したモーリス・バルスと、バルスの読者としてのプルーストを分析することにより、プルーストがバルスから何を受け取り、何を発展させたのかを調査した。具体的には、建築のイメージ、音楽のイメージ、舞踏のイメージの分析を通じて、いかに主体、エゴ、真理、魂といったエゴチズムの諸概念が機能しているのかを見た。その際に当時フランスに輸入されていたドイツ観念論の影響を丁寧に調査し、より包括的な理解を試みた。

4. 研究成果

バルスとプルーストにおける自我、魂、真理、といった諸概念は、アンヌ・アンリやリュック・フレスの指摘するように、多分にドイツ観念論からの影響を受けていることを確認した。とはいえ、フィヒテやシェリングなどの理論的枠組みがそのまま厳密に当てはまるのかというと、その点はかなり微妙な問題であった。従って、当時の知的風潮を踏まえ、むしろ教会や音楽などの芸術作品のイメージがどう作品の中で機能しているのか、そのようなイメージ群にいかにか自我、魂、真理といった概念が埋め込まれているのか、ということ进行分析することが重要な作業となった。しかしながら、バルス、プルーストの個々の宗教建築と音楽のイメージを詳細に比較検討する作業は困難を極めた。というのも、個々の作家でもそのイメージの使用法が時代により変化し、統一的なビジョンに統合することが難しかったからである。しかしながら、いくつかの共通点、類似点、差異などを細かく分析し、その一部を« Proust, Lecteur de Barrès: La généalogie de l'égotisme autour de La Colline inspirée et d'A la recherche du temps perdu »にまとめた。また教会建築と魂の表象について« La littérature de l'église - Barrès et Proust »（招待講演）において分析を加えた（在外研究員としての受け入れ研究機関であるアルゼンチンのラ・プラタ大学での講演を予定していたが、コロナ禍により延期、現在発表媒体を検索中）。

こうした研究を通じて、エゴチズムにおける身体の問題が浮上してきた。イデアリズムにあって身体の問題は躓きの石である。身体性をいかに乗り越え、イデアルな世界に到達するのか、というのが一つの課題であるのだが、同時に自分の身体こそが、思考の出発点である、というジレンマが、イデアリズムには付き物である。いわゆる心身問題の一つのヴァージョンであるが、この心身問題がバルス、プルースト二人の作家にとって重要であり、特に2人の作家が作品の中に組み込んでいる舞踏のイメージ群に大きな影を落としていることが見えてきた。そこでバルスとプルーストにおける身体の問題について、比較検討を重ねた。

その中で特にプルーストの場合はジェンダー論との関わりで分析することが有効であることが分かった。プルーストはフランスの司祭としての資格を持ち、かつ同性愛者であるシャルリュスの口を通じて、バルスの教会のイメージについて批評を加えている。しかしながら同時にシャルリュスはアルゼンチンタンゴという官能的な舞踏についても語り、これこそがシャルリュスの性的な幻想を表現する媒体となっているのである。すなわち、エゴチズム、建築、身体性の問題が同性愛者の口を通じて語られることになるのである。この点については今年中に勤務先の大学紀要論文『バルスとプルースト—エゴチズムとジェンダー—の諸問題』としてまとめる予定である。

また研究成果の一部を一般の読者に紹介するものとして、イデアリズム的なプルーストの恋愛を取り扱った『恋愛制度—束縛の2500年史』（光文社）がある。さらにはフランス、ドイツのイデアリズムが日本に輸入される際に生じた様々な誤解を紹介する『迷走する日本思想

一主体の系譜学（仮題）』（光文社）も準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木隆美	4. 巻 17
2. 論文標題 La methode de la litterature comparee	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福岡大学研究部論集、人文科学編	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 鈴木 隆美	4. 巻 49
2. 論文標題 Proust, lecteur de Barres ; La genealogie de l'egotisme autour de La Colline inspiree et de A la recherche du temps perdu	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鈴木 隆美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 光文社	5. 総ページ数 250頁
3. 書名 恋愛制度、束縛の2500年史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----